CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Tsukuba Repository

風景・風景計画の整理

著者	伊藤 弘
雑誌名	風景計画研究
巻	1
ページ	24-25
発行年	2016-07-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144515

風景・風景計画の整理

伊藤　弘

１．風景

風景とは、人をとりまく環境の眺めにほかならず、自然環境だけでなく歴史や文化の価値を伴った、人と環境との関係から生成される現象である。これは、造園学や景観工学における捉え方であり、これらの分野では、景観を操作することを目的として、景観を構造的に把握しようと景観把握モデルが提案された。一方、地理学の空間的アプローチと生態学の機能的アプローチが統合されるかたちで、景観生態学が発展してきている。

既に指摘されている通り、造園学・景観工学における景観と地理学・生態学における景観の違いは、人間が介在するかしないかの違いによるものであり、単純に物理的な人と環境の関係（位置関係や見え方）だけでなく、それらに意味づけを施す「ものの見方」なども介在した結果、風景が生成されている。

世界遺産制度や文化財保護行政では、地域の風土と人々の営みの相互作用が表象する景観を「文化的景観」としている。例えば富士見坂など、長い間住民たちに親しまれてきた風景も文化的景観のひとつといえよう。

映像がメディアの中心となっていた時代には、メディアを通して得られる情報と環境は人間にとって同時に存在しておらず、例えば幻影（イメージ）と称されるなどしていた。しかしコンピューター技術の発達に伴って、AR（Augmented Reality：拡張現実感）など情報と環境が人間の中で同時に存在すると、新たな風景が生成され、人と環境の新たな関係が構築されることも考えられる。

２．風景計画（図１）

風景計画とは風景のあるべき姿を構築することである。すなわち風景計画とは、人と環境のあるべき関係を構築することといえる。

１）風景計画の要素

風景計画は、主に主体・対象（要素+環境）・目標・方法から構成される。

計画主体とは、その対象とする要素や環境に関係する（何らかの形で働きかける）主体のことであり、行政・住民・来訪者・事業者などである。風景計画の対象は、特定の要素と環境の組合せであり、対象とする領域における産業や生活様式も関係してくるため、住民が計画主体である必要がある。

*筑波大学大学院人間総合科学研究科

計画対象は、要素と環境の組合せから構成される領域であり、例えばマクロ・メソ・ミクロなどのさまざまな空間スケールが段階的に連続して構成されており、計画に当たっては、段階に応じて対象を設定する（図２）。各段階において、物質や情報だけでなく人がどういった利用をしているかといった利用状況や、それらを誰が見るか（誰に見せるか）、といった見る人（視点）も計画対象となる。

計画目標は、特定の領域における風景のあるべき姿であり、前述した通りに、特定の領域における人と対象のあるべき関係を指す。

計画方法は目標を達成するための操作法であり、対象および対象同士の関係の操作である。そこには、単に「見る」行為だけでなく、それに加えて「する」行為(食べる、遊ぶ等)も踏まえた関係の構築も含まれる。

風景計画においては、要素だけを独立させて考えるのではなく、要素と環境をいかに結び付けて考えるか、といった観点が求められる。

２）手順

風景計画に限らずではあるが、計画の手順は風景分析−課題抽出−目標像設定−計画内容策定−予測評価−実施とな

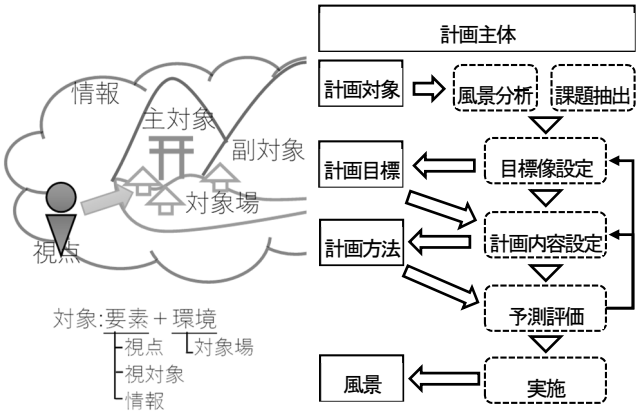

図１　景観把握モデル（左）と風景計画（右）

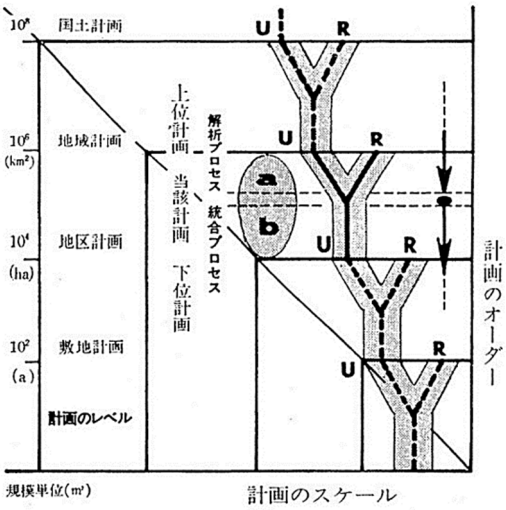

図２　計画の段階的連続構造

る。風景分析と課題抽出は、対象領域のおかれている状況などにもよるが、ほぼ同時に行うことが多い。

風景分析は、対象とする領域の現状把握と評価からなる。現状、どのような要素と環境があり、それらがどのような関係にあるのか、それによって出現する風景の特徴は何かを把握することである。要素および環境によって様々な調査項目および指標が考えられる。特定の観点から評価することで特徴を把握することもある。例えば、特定の視点からの可視領域の算出などである。その他項目としては、距離・視程、可視・不可視・不可視深度、見込角・仰角・俯角・D／H、視線入射角などがある。また、既に確立されているイメージや住民による評価なども考慮する必要がある。

課題抽出は、風景分析および評価を踏まえてどういった課題があるのかを抽出することである。対象が要素と環境の組合せであり、要素は物質・利用状況・見る人を含んでいる（つまり、誰に何を見てもらうのか）ことに留意して抽出する。

目標像設定は、特定の領域のあるべき姿を設定することである。これまでの作業成果として、風景分析による地域の特徴と抽出された課題があり、どちらを優先させて様々な空間スケールに応じた目標像を決めていくか（ポジティブマキシマムかネガティブミニマムか）も検討事項となる。さまざまな計画主体がいる中で、その像を共有することは困難なことである。例えば、歴史的にどのような眺めが評価されてきたのか、現在住民に評価されている眺めはどこか、安全安心に日常生活を営める状況はどうあるべきか、などをひもときながら合意形成を図ることも考えられる。

計画内容策定は、目標像を実現させるための手段を構築していくことである。分析結果および抽出された課題を踏まえて、誰が対象の何にどう働きかけるのかを決定していく。実際に対象の形や対象間の関係（要素同士・要素と環境・視点と要素等）を変えることと、法制度によってコントロールすることが挙げられる。また、領域内の利用を明確化することによって、意味づけを施すことも考えられる。基本的には地域における風景の特徴を踏襲し、場合によってはそれを演出するなどして地域の特徴的な風景を成立させる。近年では、アートイベントなどにこの役割を期待する傾向もうかがえる。

予測評価は、計画内容を実施した後のシミュレーションを行い、それを評価して計画の見直し等を図る。その評価項目には、風景分析の際に用いた項目を用いるなどして、計画実施前後の比較などを行う。その他、SD 法など様々なアンケートによっても評価されている。

容易に復旧可能な計画（特定のイベント実施やメディアを使った情報発信）であれば、予測評価せずにまずは実施してみて、それを評価することも考えられる。

これらの評価主体は計画主体・地域住民であることが多いが、ウェブを用いたアンケートによって、来訪者による評価も考えられる。その場合、どのような情報を提示して評価してもらうかは、慎重に検討すべきである。

３．実施

１）計画案の承認

策定された計画案は、対象に関係するすべての主体（行政・地域住民・来訪者）によって承認されることが望ましいが、非常に困難である。住民全員に承認してもらうことも難しいため、まずは管理・運営主体に、次いで住民に承認されるという手順も考えられよう。

２）実施時期

狭い領域から広い領域に至る、段階的に連続している空間スケールの中で多様に存在する計画対象に対して、どの計画内容をどういったタイミングで誰が実施していくかも検討する必要がある。そのためには、ネットワーク工程表などが有効といえる。

３）管理・運営

策定された計画案を実現させていくために、各空間スケールに応じて管理・運営主体を検討していく。風景は狭い領域から基礎自治体に至る広い領域に至るまで、連続して関係しているものである。広い領域を対象にした風景の管理・運営は、狭い領域における住民をはじめとする各主体の協働による管理・運営の積み重ねと、狭い領域同士の調整や、住民のいない領域の管理・運営などにより、総合的に広い領域の管理・運営を行う行政（基礎自治体から国に至るまで）によって風景が生成される。管理・運営に住民が携わることによって環境の意味づけ（住民による所有意識等）が変化し、住民と環境の関係が変化することもあろう。

４．おわりに

何のために目標像をたて風景計画をたてていくのかというと、それは人間が環境と向き合いながら、より豊かな体験を得るためといえる。生成された風景もさることながら、そこに至る風景計画策定や計画実施などの過程も、人間と環境の関係構築に寄与するのである。

参考及び引用文献

1）塩田敏志（2008）：森林風景計画学：地球社、190pp.
2）篠原修（1982）：土木景観計画　新体系土木工学59：技法堂出版、pp.123-178
3) 落合陽一（2015）：魔法の世紀：PLANETS，219pp.
4) 日本造園学会-東日本大震災復興支援調査委員会（2012）：復興の風景像：マルモ出版、135pp.